

1. ナッシュビル総会

2003年11月12日から15日までテネシー州の州都ナッシュビルでアメリカ土木学会(ASCE)の総会(Civil Engineering Conference & Exposition)が開かれ、日本土木学会を代表して、筆者と村上雅博(高知工大教授)、富永眞生(富永技術士事務所代表)、西村成夫(土木学会国際室長)各氏を団員とする4名の代表団が参加した。また協力協定(Memory of Understanding: MOU)を締結している国々の学会から11か国、100名の参加者があった。ASCEからは1400名弱(学生会員210名強を含む)の会員が参加した。参加者の多くは夫人同伴であったことには毎度のことながら日本との文化の違いを実感した。

テネシーと聞くとわれわれ土木技術者はすぐにテネシー川開発公社(TVA)を思い出す。TVAが提起した問題、地域開発の概念、その投資妥当性分析手法などは戦後の日本の開発思想に大きく影響した。いやその影響は今に及んでおり、現在問題となっている道路公団の民営化問題で議論となっている公共事業における費用・便益、費用分担則、妥当投資額などは主としてTVAで定着した概念なのである。

まったく別な観点から見ると、テネシーはカントリーやプレスリーの音楽を生み出した州であり、なかでもナッシュビルはその中心であった。そこにある音楽殿堂(Country Music Hall of Fame)には全米、全世界からファンが押し掛けている。

2. ASCEの状況

ASCEの会員数は13万3000人(学生会員2万名を含む)でこの会員が国内の50支部と、日本を含む海外主要国に置かれた支部に所属している。ASCE本部の年間予算は約5000万ドル(55億円)の巨費に達する。それに応じて正会員の年会費も185ドル(2万円)と高額である。日本土木学会の正会員数3万4000人、本部の単年度収入16億円と比べると会員数、予算とも3.4倍の規模となっていて、人口比から見てもASCEの活動の活発さがわかる。

特筆すべきことは技術活動(Technical Activity)と同じくらいあるいはそれ以上に職業活動(Professional Activity)に熱心なことで、特に技術者の社会的・経済的地位の向上、インフラ事業促進の政治活動も熱心に進めている。

国際活動にも熱心で、各国に海外支部を設け、補助金を送って会員の海外活動を支援している。現在1万3000人の会員が海外に居住しているが日本でも1980(昭和55)年に支部が設立され、現在200人の会員が所属している。ASCEは60を超える国の学会と協力協定を結んで、情報交換、人事交流などを図っていて土木学会とは1988年にMOUを締結している。この協定に従って双方の学会は代表団を交換派遣しており今回もそれに沿って総会に参加したものである。ちなみに日本土木学会のMOU締結国は現在ASCEの約3分の1の23か国となっている。MOUもさることながら土木学会の海外支部設置はやっと始まったばかりである。

3. 総会の状況

4日間の総会は開会式、事業報告、会長就任式、表彰式、技

術部門会議、職業部門会議、国際活動部門会議、晩餐会などから成っている。今年の総会のメインテーマは「Keys to Your Future!」であったが、具体的には1990年代以来のASCEの戦略方針である「国際活動の強化」が重要な位置を占めていた。それを反映して開会式の基調講演は、陸軍工兵隊(US Army Corps of Engineers: COE)司令官のR. Flowers中将によるイラクにおける米軍と工兵隊の活動報告であった。

多数の国の代表団を招待しているのも戦略方針に従ったもので、外国代表団との親睦活動、情報交換あるいはPR活動が盛んに行われた。

新会長就任式(Inauguration)

2003-2004年のASCE会長には、その151年の歴史上初めて女性が就任した。Patricia (Pat) Galloway 女史である。彼女の就任演説は「What is a Civil Engineer?」と題し「われわれは社会の未来を用意するものである。このことを誇りをもって社会に訴え、また自らも実行しなければならない」という格調の高いものであった。

彼女は日本に知人が多く、昨年10月と11月にも来日し建設マネジメントのシンポジウムに参加している。さらに驚いたことには高知工大の社会人コースにご主人のNielsen氏とともに入学された。筆者とはアジア土木技術者会議(ACECC)を組織する際、共に働いて以来の友人であるが、活動的で親しみやすい人である。就任式でご主人を「First」First-Gentlemanと紹介して満場の笑いを誘うというユーモアもお持ちである。

国際円卓会議(International Round Table)

総会では必ず、その年の重要課題について各国代表による円卓会議を開く。今年のテーマは「21世紀の世界水問題と戦略」で、座長はCOEのPriscoll氏顧問、基調報告者は世界水パートナーシップ(GWP)会長のCatley-Carlson女史であった。お二人とも世界水会議(WWC)理事会では筆者の同僚である。GWPや半乾燥国代表の発言はどうしても水利用に偏りがちであったが、日本から村上教授がモンスーン・アジアにおいては利水とともに治水の重要なことを強調する報告を行った。台湾代表も洪水被害の実態を報告し、治水の重要性を訴えた。韓国代表はソウルの高速道路の地下に入れた都市河川を復元する事



写真-1 国際円卓会議における日本代表団



写真-2 Galloway新会長を囲む日本代表とASCE幹部 国際晩餐会で

業について報告した。これは東京の日本橋と重ね合わせ興味深いものであった。この事業は昨年12月にNHK TVに取り上げられるほど日本でも反響を呼んだ(写真-1)。

国際晩餐会 (International Dinner)

国際会議においては、公式の討論の他に食事をしながら意思疎通と親睦を図るのが通例で、晩餐会や昼食会が重要視されている。今回も各テーブルではさっそくそれを実践し、Galloway新会長も精力的に各テーブルを回っておられた。

晩餐会ではもう一つ「重要な」プログラム...隠し芸大会がある。日本代表団はアメリカ民謡「Oh My Darling Clementine」とその替え歌「雪山賛歌」を合唱した。幸い好評で後になっても「Good Performance」と言われたのには恥かしいやら嬉しいやらであった。こういう所から相互の理解が進むのであろう(写真-2)。

技術部門会議 (Technical Sessions)

学会活動として技術部門は職業部門と同様に重要である。総

会では多数の技術分野で討論会が開かれた。第2日は地盤工学の日としてJ.クリスチャン博士がテルツァギ記念講演を行った他、地震波の解析、新設計基準、地震シミュレーションについての討論が行われた。他には9.11事件のWTCビルの構造解析、都市の微気象、構造物国際設計基準、汚水処理、貯水池群管理、土木遺産の保全などの興味ある問題が議論された。

職業部門会議 (Professional Sessions)

建設産業各社のCEOによる経営についての討論、ITやインターネットの活用についての討論が行われた。他にカシ責任、技術者資格と教育、労働安全、技術者の政治活動などが議論された。なかでも技術者の倫理に関してはいくつかの分科会が開かれ、活発な討論が行われた。筆者の参加した分科会では、日本の「談合」が取り上げられたので「談合はタマエは非合法であるがアメリカの交渉による契約方式に似たものであった。倫理、法制は時代、国、文化によって異なる。このような機会に意見を交換し、グローバルな倫理を構築して行くべきである」と述べた。

展示会 (Exposition)

総会名称は正式にはConference & Expositionとなっていて約90社の出展企業も展示会には力をいれている。中でもインターネットによる通信教育(e-Learning)システム、公共事業のビジネスモデルはこれから発展するように思われた。その他、路面排水の汚濁対策などの環境保全技術、GIS活用モデルなどがあった。

次期総会

2004年の総会は「Chart the Future!」をメインテーマとしてメリーランド州のボルチモアで開かれる。総会ではシアトルのWilliam Henry氏が会長に就任することになっている。

フィリピン土木学会(PICE)出席報告

フェロー会員 古木守靖(土木学会専務理事)

1. 日時、場所：2003年11月6日～8日、マニラ国際会議場
参加者：約2500名

2. PICEとは協定関係にあり、また3rd CECARのPRをも行うことも兼ねてJSCEからも参加することとした。

(1) 開会式はおよそ1000人の参加のもと、マニラ湾に面するバサイ市内の国際会議場大会議場で開催。

主なスピーチは以下のとおり。

- ・会議場のあるバサイ市長および上院議員によるユーモアあふれる来賓挨拶。
「技術者はストレートに話すのが好き、技術者の前では長い演説は禁物だ、政治家や法律家の長い演説の前では半分の聴衆が寝てしまう。」と笑わせていた。
- ・2003年の最優秀土木技術者に、前のPICE会長であるSison氏が選ばれた。Sison氏はバスケット選手も目指したという長身のスポーツマンでコンサルタントとして活躍してきた。
- ・Manuel Bonoan会長による挨拶。Bonoan会長は長く政府の要職にあり次官まで勤め、また現在も大臣のうわさもある。DPWH(公共事業道路省)において長い間

ODA案件の窓口にあったので日本の友人知人も多い。

(2) プレナリーセッション

- ・日本からJSCEの紹介、Bonoan会長から一年間の活動報告
- ・フィリピンのDr. Lazaro元会長から「フィリピン建設産業の国際競争力」についての講演があった。フィリピンのコンサルタントが国内のODA事業においてもきわめて競争力が低い。そのため政府の支援、コンサルタントの努力が必要である。また現在フィリピンでは海外のコンサルタントはプロジェクトごとの登録が必要になっており、違反のないように監視すべきとのことであった。
- ・この件に関して地元で活躍中の日本のさるコンサルタントに聞いたところでは、コンサルタントの事業ごとの登録の件は、大きな問題となっている。現在現地の登録の際に必要な資格としてAPECエンジニアを活用しているがレベルが高すぎて対応困難な場合がある。フィリピンとの対応では土木学会の資格(2級以上でも良いかもしれない)が最適であり、この点を上申しようと考えているとのことであった。



写真-1 会場となった国際会議場



写真-2 壇上のバサイ市市長(演壇)とボノアン会長

(3) PICE の概要

- ・会員は約5万人と称しているが、会費未納の者も多く実態ははっきりしないとのこと。
- ・理事は14名で官庁、建設会社、コンサルタント、地域代表、大学の各分野に分かれて選出される。会長は理事会が選出する。
- ・全国各地に92の分会がありそれぞれ大学が代表となっているようである。
- ・日本の大学に滞在した方や、研修を受けた会員も多く、何人かの会員から話しかけられた。日本の企業も大会の

スポンサーになっており日本企業のプレゼンスも目立った。

4. その他

ADB(アジア開発銀行)の関係部局を短時間だが訪問できた。ADBでは現在ポリシーメイキング、ナレッジマネージメントの導入、コンプライアンス確保といったソフト分野に関する関心が高く、単独のプロジェクト志向ではなくなっているとのこと。日本の土木学会との連携についても興味があるとのことであった。

BOOK PICK UP



トンネル・ライブラリー13 都市NATMとシールド工法との境界領域 — 荷重評価の現状と課題 —

トンネルに作用する荷重という用語自体の意味合いや覆工、セグメントの設計用荷重の評価は適切なのか、現状どれも明確になっていません。本書はシールド工法とNATMの境界領域を対象に、両工法の歴史を紐解き、それぞれの設計用荷重の考え方の背景と現状、および設計理論に関する研究をレビューし、さらに荷重評価の現状を収集、境界領域における都市NATMとシールド工法の両者の設計について、統一的な解釈があるべきなのかを考察しました。

シールド工法とNATMの境界領域における設計荷重の現状と考え方を理解するために、本書のご一読をお勧めいたします。

編集：トンネル工学委員会

技術小委員会 トンネル荷重検討部会(部会長：東京都立大学・西村 和夫)

平成15年10月発行、A4判、244ページ、並製本

定価：2,100円(本体2,000円+税)

会員特価：1,890円 送料：470円

FAXまたはE-mailにて購入申込受付中

●お申込み・お問合せ先

(社)土木学会・出版事業課

TEL 03-3355-3445 / FAX 042-946-0969

http://www.jsce.or.jp/publication/frameset.htm

丸善(株)・出版事業部

TEL 03-3272-0521 / FAX 03-3272-0693